一流高校男女バレーボール指導者が持つ「コーチング観」に関する研究

松田 健太郎*, 森 祐貴**, 根本 研***, 伊藤 雅充***

A study on the "coaching view" of elite high school male and female volleyball coaches

Kentaro MATSUDA*, Yuki MORI**, Ken NEMOTO***, Masamitsu ITO***

Abstract

The nature of coaching can be regarded as a chain of decision-making. In order to make better decisions, coaches need not to solely rely on their own experience, but also they should learn from others. An established coach's underlying philosophy is employed when he or she must make difficult or instantaneous decisions; it can also help the coach offer better guidance. However, while there has been a rise in the amount of qualitative research seeking to understand the aims and practical knowledge acquisition process of elite athletes, there are few studies that focus on the underlying philosophy and approaches of coaches to consider the matter from a coaching perspective.
In this study, data were gathered from six male and female volleyball coaches at top-tier high schools through an interview survey and SCAT analysis to identify participants' coaching outlooks. The study results can be used to pass on the practical knowledge of elite practitioners to the next generation of coaches.
The analysis shows that all six coaching outlooks place the greatest emphasis on "future growth of the players" and are based on "study", "context explanation", " clear expression and enforcement of goals", and "positive coach-athlete relationships".

Key Words: Coaching view, Qualitative research, Elite leaders
キーワード：コーチング観、質的研究、一流指導者

Ⅰ．緒　　言

コーチングとは意思決定の連続である[1) 13) 14) 15) 20)]。スポーツ現場では様々な場面が存在し、いかなる場面でも良い意思決定ができるような知識を有しておくことが必要である[15)]。より適した意思決定を可能にするには、指導者自身の経験だけに基づいて意思決定を行うのではなく、それ以外の様々なものを学び取り、選択肢を多く持った中から適切なものを選択していくことが必要である。スポーツの現場では、「名選手必ずしも名コーチにあらず」という表現がよく用いられる。名選手と呼ばれる人は、自らの身体の動かし方や感じ方に関する多くの着眼点を身につけ、優れたパフォーマンスを発揮することができる。しかし、名選手が指導者として自らが獲得した着眼点をそのまま選手に伝えたとしても選手が同様の着眼点を獲得するかどうかはわからない。なぜならば、選手は皆異なる身体や背景を持ち、身体や環境の様相は時々刻々と変化するからである[12)]。また、指導者の持つ着眼点があらゆる選手にとっての普遍的な正解となるわけではなく、自分の経験した“過去の遺産”のみでは指導は遂行できない[8)]。

近年、優れた選手の着眼点や実践知の獲得過程を、インタビュー調査での語りから明らかにしている質的研究が増えてきている[2) 3)]。バレーボール競技においても、一流バレーボール選手を対象にした報告がされている[7) 22)]。そもそも、質的研究とは、現象の性質や特徴など数値で表せないデータを扱う研究法と分類されている[21)]。『外れ値』を除去する大半の量的研究と違って、質的研究は例外的なケースや特異性に注意を払うので、現象のより完全な理解が得られる[24)]」、「卓越した選手の実践知を知識化するためには、語りとして事例的に記述する質的研究が有用である[16)]」というような利点がある。

上述されている先行研究[2) 3) 7) 22)]では、優れた選手に焦点を当てているものが多く、コーチングという視点から指導者が持つ哲学的思想やコーチング観という部分に着眼している研究はほとんどない。確立された指導者の哲学的思想は、難しい意思決定場面や瞬時の意思決定場面の一助となり、より良い指導を可能にする[23)]。また、指導者と競技者が関わることになるコーチング・プロセスにおける指導者の実践と行動を分析することは非常に重要であり、他の指導者の知識源に成り得る。コーチの成長は学びによって為される[23)]と述べられているように、これまでに顕著

*：東北福祉大学　Tohoku Fukushi University
**：京都工芸繊維大学大学院　Kyoto Institute of Technology University
***：日本体育大学　Nippon Sport Science University

（受付日：2019年10月18日，受理日：2020年3月3日）

な結果を残している優秀な指導者たちがどのようなコーチングを実施しているか理解し学び取ることが必要である。そして、性別や年代の違いを越えて固定概念を払拭して多角的視点を持って、指導者自身が学び続けることに意義があると考えられる[17]。そこで、本研究の目的は、一流高校男女バレーボール指導者たちを対象にインタビューを実施し、対象者の持つコーチング観を明らかにすることであり、後進の指導者に優れた先駆者たちの実践知を提供することに本研究の意義があるだろう。なお、指導者の持っている哲学観や価値観や見方、考え方について、Coaching Philosophy[11] や Coach's Perspective[5]、Coaching View[18]、指導観[12] など研究によって様々な言葉が使われている。そこで、本研究はこれらすべてを「コーチング観」と定義して研究を進めていく。

Ⅱ．方　　法

1. 対象者

本研究では、高校生男女を指導している男性監督 6 名（平均年齢 55.8 ± 9.2 歳）を研究対象者とした（表 1）。対象者選定の際の基準としては、①全国大会の優勝経験がある、②全日本選手を輩出しているの 2 点を設定した。なお、研究対象者 6 名には、事前に本研究の目的・方法、インタビュー調査への参加は自由意志であること、調査結果を研究目的以外に使用しないことを口頭で説明して同意を得ている。

2. データ収集

2-1. インタビュー調査手続き

インタビュー調査は、2012 年 2 月上旬に実施された。まず、調査協力者に電話にて調査への協力を依頼した。その後、場所の日程調整を行い、調査対象者の活動拠点、もしくは調査対象者の指定する場所にてインタビューを実施した。インタビューワーはバレーボールに精通し、コーチングの研究を行っている 2 名であった。

2-2. インタビュー調査内容および方法

インタビュー内容については、あらかじめ、研究グループで研究テーマに関する議論を行い、何に焦点を当てたインタビューにすべきかを決定した。「コーチングで大切にしていること」を念頭に置き、それに付随して「指導者になったきっかけ」「コーチ自身に影響を与えたこと」「指導法の変化」についてのインタビューを行うこととした。インタビューは、探索的半構造化面接法といわれる半構造化インタビューを採用した。そのインタビュー内容を IC レコーダーに記録し、後にテキスト化を行った。

3. データ分析方法

本研究では、文字化したデータを SCAT（steps for coding and theorization）を使用して分析を行った。SCAT とは大谷[19] が提唱する質的データの分析に有効な手法である。また、1 人 1 時間以上にもなるインタビューから作成されたストーリー・ラインは調査対象者個人の特定を防ぐためと文量の多さから本論文内の掲載はしなかった。なお、本研究の分析による内容妥当性を確保するために、バレーボール指導歴 25 年以上の指導者、コーチング学を専門とする研究者、コーチング学を学んでいる大学院生 4 名と議論を行い、適切な分類内容であるかについて頻回に検討を重ねた。

Ⅲ．結　　果

1. カテゴリーの分類

今回対象とした指導者たちが、コーチングにおいて大切にしていることを SCAT を用いて分析を行った。次に各指導者のストーリー・ラインを記述し、理論記述を行った。

表1　調査対象者プロフィール

	年齢	対象	指導高校の主な成績
コーチA	68歳	高校男子	春高バレー：5年連続26回出場　優勝2回 インターハイ：2年連続25回出場　優勝2回 全日本選手輩出
コーチB	62歳		春高バレー：19年連続19回出場 インターハイ：19年連続19回出場 全日本選手輩出
コーチC	62歳		春高バレー：28回出場　優勝1回 インターハイ：26回出場　優勝1回 全日本選手輩出
コーチD	55歳	高校女子	春高バレー：16年連続27回出場　優勝2回 インターハイ：16年連続27回出場　優勝4回 全日本選手輩出
コーチE	44歳		春高バレー：9年連続34回出場　優勝4回 インターハイ：9年連続34回出場　優勝4回 全日本選手輩出
コーチF	44歳		春高バレー：14年連続29回出場　優勝7回 インターハイ：14年連続29回出場　優勝6回 全日本選手輩出

その理論記述したデータから 17 個の概念を生成した。また、その概念をまとめたサブカテゴリーを 4 個生成し、最後にそれぞれのカテゴリーを生成した（表 2）。

2. 各カテゴリーに関する要因

概念を、[　] で示す。サブカテゴリーを、【　】で示す。カテゴリーを『　』で示す。

2-1.『学び』に関する要因

『学び』のカテゴリーは、【フォーマル】・【インフォーマル】という 2 つのサブカテゴリーから生成された。【フォーマル】は、対象としたコーチたちが指導者になってからの学びのことを指すサブカテゴリーである。これは、[指導者になってからの過去の経験・体験・知識]・[現在・未来の経験・体験・知識] の 2 つの概念から構成した。【インフォーマル】は、対象としたコーチたちの学生時代の学びのことを指すサブカテゴリーで [学生時代の過去の経験・体験・知識] の単一の概念から構成した（表 3）。

表2　概念とサブカテゴリーとカテゴリーの生成

概念	サブカテゴリー	カテゴリー
指導者になってからの過去の経験・体験・知識 未来の経験・体験・知識	フォーマル	学　び
学生時代の過去の経験・体験・知識	インフォーマル	
時代、選手、環境、状況		コンテキストの解釈
目指す方向性の明示 チームコンセプトの明示 役割の明確化	チームの凝集性	方向性の明示と徹底
柔軟な考え方の促進 基礎基本の重要性 選手の能力の向上	個の有能さの向上	
情熱、適切な指導、責任感、コミュニケーション		良好なコーチアスリート関係

表3　カテゴリー分類『学び』

対象者	理論記述	概念	サブカテゴリー	カテゴリー
A	コーチとしての学びは大学を卒業してからであり、特に実業団での5年が重要であった	指導者になってからの過去の経験・体験・知識	フォーマル	学び
A	実業団に行っていなければ、選手のコンテキストに合わせていない指導をしていた可能性があったことを示唆している			
A	実業団での先輩の経験から多くのことを学ぶことができ、他の環境で学んだ先輩に技術面や精神面での在り方を多く学べた			
C	このコーチは指導者になってから経験を通して学んで変化していった			
C	指導者になってからは相手の指導者に対しての敵対心が指導に影響し、勝つために積極的になっていった			
D	同級生の指導者から結果よりも大切なことがあることを教えてもらった			
D	指導者になるときも行動には意味があることを伝えられ、特にスポーツの指導者になる人は選手のことが理解できなければいけないことを教えられた			
D	指導者になってからの方が学ぶことが多く、指導者になったことで自分も変わっていると感じており、選手に対しても感謝の気持ちや思いやりを持って指導している			
E	指導者になってから、指導の現場で専門的知識の必要性・重要性を強く感じている。そのため指導者になってから自分自身で勉強している			
E	指導者になってから、自分に対して影響を与えた人は前監督であった。前監督は体育の先生ではなかったので、自分の知らなかった色々な知識を身につけた			
F	指導者になってから選手として国体チームでプレーしている時に学んだ			
F	若い時から、先輩の指導者をよく観察し学んでいた。他のコーチから良いものを盗み取っていた			
B	他の人から学ぶことが重要であり、知識や話し方などを体験していくことが大切	未来・現在の経験・体験・知識		
B	若い時に失敗することで考え方を広げる必要もある			
D	指導書やコーチングの本に書いてある事より選手に対して感謝の気持ちと思いやりを持って指導していれば、選手は理解していくようになると実感しており、Formalな学びとは違い現場での対応が重要			
D	このコーチはメンターに全幅の信頼を寄せている。コーチングについても相談している			
E	一流の指導者になるためには知識が豊富であることと考えている。選手が育つため、チームが勝つためには幅広い専門的な知識が必要			
E	色々な視点を持つこと、色々な角度で伝えられる表現力を持つこと、ボキャブラリーを多く持つこと、対応力(人によっても状況によっても)を持つことが大切			
F	状況に応じて適切なコーチングができるように、日々自分自身を振り返り向上心を持って成長していくことが重要			
F	負けた試合に対しても向き合っていくことが大切			
F	自身に影響を与える指導者と出会うことが重要で、自分に対して意見を言ってくれる人の存在が大切			
A	大学生の頃はバレーボール中心の生活だったので専門的知識が獲得できた	学生時代の過去の経験・体験・知識	インフォーマル	
B	大学で経験したことがバレーボール人生の基盤になっている			
B	大学バレーボール部は人として成長できる環境であり、今の自分があるのはバレーボール部で経験したことがあると言っても過言ではない			
B	大学に進学してからは、自身のバレーボール観の構築ができた時期であり、天狗になってしまったことで自分自身を見直せた時期もあった			
C	中・高の先生の影響が非常に強烈であり、自分を形成してくれたと言っても過言ではない			
C	特に高校の先生には思い入れが強く、その人の考え方(哲学)が今の指導に影響している			
D	当時は指導者で日本一になることを目指しており、大学生の時にすでに他の指導者から学ぶことを行っていた			
D	大学時代には同級生と一緒に企業のコーチに行っていた			
E	大学に進学してからの経験で役立っていることは、何に対しても手を抜かずに行動すること			
E	理不尽なことであっても徹底的にやることは、社会に出てからの大きな財産となっている			
E	学生時代の厳しい経験は指導者になるためには必要なことだと捉えている			
F	指導に影響を与えている人は大学時代の先生で、精神面の指導に影響している			
F	大学では他の競技の人と話をして成功や失敗談を聞き、方法論で学んだことが印象に残っている			
F	授業以外の学びが多いこと、色々な経験ができることが大学のいいところだと考えており、現場の学びを聞くことが大切			

2-2.『コンテキストの解釈』に関しての要因

『コンテキストの解釈』のカテゴリーは、[時代]・[選手]・[環境]・[状況] の 4 つの概念から生成された（表 4）。

2-3.『方向性の明示と徹底』に関する要因

『方向性の明示と徹底』のカテゴリーは、【チームの凝集性】・【個の有能さの向上】という 2 つのサブカテゴリーから生成された。【チームの凝集性】は、指導者がチームのパフォーマンスの向上に向けて、チーム全体で目指す方向性を明確に示すことを説明するサブカテゴリーである。【チームの凝集性】は、[目指す方向性の明示]・[チームコンセプトの明示]・[役割の明確化] の 3 つの概念から構成した（表 5）。

表4　カテゴリー分類『コンテキストの解釈』

対象者	理論記述	概念	カテゴリー
A	自分の時代との違い、コンテキストの違いを理解した	時代	コンテキストの解釈
B	時代に合わせた指導スタイルが必要		
C	指導者になった当初は、選手との価値観が違いが大きすぎてコンテキストにあった指導ができていなかったと感じる		
E	時代が変化しているので、それに指導者自身が対応して変化していっている		
F	このコーチは時代に合わせた指導をすることを意識しており、結果も出ていることで、自分の指導に自信を持つようになってきた		
A	人それぞれの感じ方を理解することが大切	選手	
A	指導方法として1対1でのコミュニケーションを大切にしており、1人1人のレベルにあった指導をしている		
B	指導者は即時に指摘してあげる必要があり、指摘のやり方も選手1人1人によって言い方や方法を変えて行う必要がある		
D	教えることにマニュアルはなく、1人1人選手たちのコンテキストに合わせて指導している		
D	高校で終わりではなく、1人1人のコンテキストを考えて指導している		
B	カテゴリーが違えば指導内容も全く違うと感じ、高校の指導者になった時に全てを変化させた	環境	
C	全国でもトップになってきたチームに対して、強いチームが見せる姿勢の在り方を指導しており、技術面よりも姿勢の大切さを伝えている		
F	日本のコンテキストに合ったオリジナルを作っていかなければいけない		
A	毎年の指導方法は異なっており、選手やチームのコンテキストに合わせた適切な指導を行うよう心掛けている	状況	
D	相手によって戦術を変化させ、相手のレベルによっても変えていくことを求めている		
E	色々な生徒がいるので、どのような状況にも対応できる知識を身につける必要がある		
F	勝つためには指導者自身の色を出さないといけないと考えており、状況に応じて適切なコーチングを行うことが必要である		
F	毎年毎年プレースタイルや戦術を選手によって変化させる		

表5　カテゴリー分類『方向性の明示と徹底』

対象者	理論記述	概念	サブカテゴリー	カテゴリー
A	現在の高校に赴任した時、選手たちに結果を求める指導へと変化させ、選手たちの価値観も変化させた	目指す方向性の明示	チームの凝集性	方向性の明示と徹底
B	大切なのは、心(取り組む姿勢)の部分の指導である			
B	素質を持った選手を成長させていくことが必要であり、高校だけっで勝つ指導にしない			
C	全国でもトップになってきたチームに対して、強いチームが見せる姿勢の在り方を指導しており、技術面よりも姿勢の大切さを伝えている			
C	勝利至上主義にならないように心がけているが勝つことの意味というのはスポーツをしているからこそ伝えられる意義だと理解している			
D	コンセプトをただ唱えているだけでなく、自分自身がどう考えるのかが大切である			
E	高校でやっていることをそのまま全日本代表でやっても通用しない			
F	選手には指導者のためにではなく、自分自身のためにプレーするように伝えている			
F	試合に負けても次につながる負け方を求めており中途半端に負けるなら、思いっきり負けた方が良い			
F	スポーツの世界は両極にあることを両方実践していかなければいけない矛盾の世界である			
B	目に見えない気持ちを伝えることが一番難しい	チームコンセプトの明示		
B	結果ではなく過程を大事にしており、選手の取り組む姿勢を評価してあげることが重要			
C	指導する高校でトップチームを作っていくために、そのチームにいることの自覚を持たせていくことを最重要視しており、入学前から行なっている			
C	勝利を求めることが真剣になれて、その真剣さを楽しめるように実践している			
D	チームのコンセプトを明示して唱える			
D	バレーボールの試合に関して、どのカテゴリーでも目に見えないところや数字に出ないところが重要			
D	物事には意味があって、本物になるためには意味をしっかりと理解することが必要である			
E	大切なのは、逃げない・諦めない・ごまかさないの3つであり指導者が徹底すること			
F	方針を変えるのではなく、チームカラーを活かすための工夫が必要			
F	選手も指導者も無欲であることが大切であり、向上心を持ち前進していくことが必要			
A	さらに選手に役割を与え、選手によって役割や責任の持たせ方を指導している	役割の明確化		
B	チーム内でも役割があると考えておりチームが勝つべき行動をすることが重要			
B	高校生に対しての上下関係の指導は厳しくはしていないが、学年毎の役割があり、自分の役割を理解するように指導している		個の有能さの向上	
D	コンセプトに当てはめた時、選手1人1人が役割を明確に捉えることが重要			
F	思考、判断、決断、実行の優れた選手を育てていくことが必要で、役割を果たせる選手が重要			
B	人との関わり合いや、選手同士の思いやり、ボールをどういう気持ちで扱うかにもつながる	柔軟な考え方を促進		
C	チームが競技力を向上させるために選手自身に学ばせる			
D	本当の感謝の気持ちが理解できていれば、次の人のことを考えてプレーするという思いやりの気持ちを持つこと			
D	練習に対しての考え方も1つ1つに意味があり、違うプレーにもつながっている			
D	数字で出るところは教えることができるが、目や数字で見えないところはやらされてはできないもので、選手自身が理解していくことが重要			
D	決まりきったことではなく、状況に応じてプレーできる選手が望ましい			
E	心技体のバランスというのは選手が自立していくことだと定義しており、課題や問題を見つけて改善していく必要性がある			
F	試合中でも練習中でも伝え続けることが必要であり、無欲であることが良い結果を導く			
F	試合をオセロゲームのように考え、物事をシンプルに捉えて的確な判断をすること、戦術眼を鍛えさせていくこと、柔軟な考えを持たせることが結果につながる			
F	選手にはいつも考え方の指導を行なっており、どんな状況でも無欲でプレーすることが大切			

A	バレーボールをシンプルに難しく考えないようにさせ、基本的なプレーやトレーニングの面を重視	基礎基本の重要性	個の有能さの向上	方向性の明示と徹底
A	基礎基本をしっかりできるようにし、バレーボールの本質を理解させることを徹底			
B	ボールをつなぐことが重要			
D	他にも対人レシーブが重要な練習であり、いろいろな視点や観点を持つことが上達につながる			
A	経験や体験が重要	選手の能力の向上		
A	自分たちがボールをコントロールする技術を身につけること、対応していくための準備が重要			
B	高校ではトレーニングを重点的に行っている			
B	高校生のバレーボールは技術・体力・精神の3つが重要			
D	一瞬での状況判断が重要になり適切なプレーが求められる			
D	データに基づいた練習だけでなく、本当に意味のある練習をしていなければ勝つことはできない			
D	3人レシーブは色々なプレーの動き方や見方、考え方、ボールの扱い方につながり、意味のある3人レシーブだけをやっていてもチームは強くなる			
E	勝つために必要なことは心技体である			
E	心技体とは、人としての心をしっかりと持ち、知識からつなげる技術を身につけ、正しい体の使い方をすること			
F	バレーボールで真剣勝負することは、もの凄い集中力が必要であり、試合でできるように練習の時から集中力を高めて練習の中で能力を高めさせている			
F	コートの中の6人の力が足し算ではなく掛け算になるようにしていくことが必要			

表6　カテゴリー分類『良好なコーチアスリート関係』

対象者	理論記述	概念	カテゴリー
C	大切なことはバレーボールに対して誰にも負けない気持ちである。その中に情熱や覇気などが含まれており、それらをなくさないように意識して指導してきた	情熱	良好なコーチアスリート関係
D	情熱があって指導力がある指導者が一番である		
E	指導者が言い訳すると逃げになってしまうので情熱を持って生徒に触れ合うことが大切	適切な指導	
B	起こったプレーに対して適切な評価を伝えてあげることであり、内面的な部分まで指導していくことが重要		
B	指導者は即座に指摘してあげることが必要		
F	最初の骨組みが肝心で、ゴールから逆算してどのような設定、コンセプトで指導していくかが重要		
A	コーチがけじめをつけて行動することによって、選手にもけじめがついてくる	責任感	
A	コーチはRole Model(お手本)であるべき		
C	誇りを持って指導に当たるようにしている		
D	指導者が主役ではなく、選手のためを思い指導するべき		
D	選手に対しても感謝の気持ちや思いやりを持って指導している		
E	選手と指導者の望ましい関係として、指導者としての姿勢が大切である		
F	負けたら指導者が責任を取るべき		
A	1対1でのコミュニケーションを大切にしており、1人1人のレベルに合った指導をしている	コミュニケーション	
B	親とのコミュニケーションを特に大切にしている		
D	1人1人に対して指導することにより、選手にも感謝や思いやりの気持ちが伝わる		
E	生徒と向き合うことが必要		
F	コミュニケーションが重要だと捉えている。特に女子の指導者はコミュニケーションが大切		

2-4.『良好なコーチアスリート関係』に関する要因

『良好なコーチアスリート関係』のカテゴリーは、[情熱]・[適切な指導]・[責任感]・[コミュニケーション] の 4 つの概念から生成された（表 6）。

3. コーチング観

本研究で対象とした指導者たちは、共通点として「先を見据えた選手の成長」を重要視しており、『学び』、『コンテキストの解釈』、『方向性の明示と徹底』、『良好なコーチアスリート関係』で構成されていた（図 1）。その学びによって、コンテキストを解釈し、指導者の関わり方として方向性の明示と徹底・良好なコーチアスリート関係につながっていると分析された。選手を成長させることによって、指導者は多くのことを学んでいき、一番下の『学び』に戻り、サイクルしていくことが推察された。

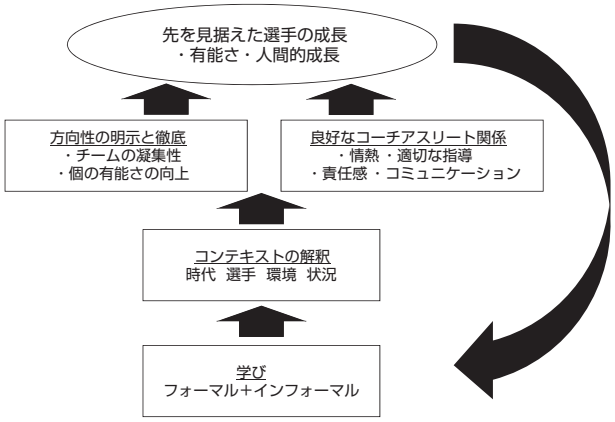

図1　コーチング観のサイクル

Ⅳ. 考　　察

今回対象とした指導者たちのインタビューからの分析によって、『学び』、『コンテキストの解釈』、『方向性の明示と徹底』、『良好なコーチアスリート関係』の 4 つのカテゴリーが生成され（図 1）、「コーチング観」の共通点として、バレーボールを通して、先を見据えた選手の成長を意識したコーチングを心がけていることが分析結果により明らかとなった。

1. 『学び』に関する要因

『学び』の部分において、サブカテゴリーで分類された過去の学生時代の経験からの学びである【インフォーマル】と指導者になってからの学びである【フォーマル】では、

【インフォーマル】の割合の方が大きいのではないかと当初仮定していたが、インタビューの中で、コーチＥの「指導者になってから、指導の現場で専門的知識の必要性・重要性を強く感じている。そのため指導者になってから自分自身で勉強している。」という記述もあるように、コーチング現場で直面する「不確実さの中での素早い意思決定」[4] をより確実にしていくために、学び続けていることが推察できる。

2.『コンテキストの解釈』に関する要因

『コンテキストの解釈』を構成する [時代]・[選手]・[環境]・[状況] の４つの概念にあるように、指導現場において、時代などの社会の風潮や対象者である選手の性別や年齢、目標値などを把握して考慮する必要がある。また、多種多様なコンテキストの中で、良い指導を実践していくためには指導者の専門的知識（Professional knowledge）、対他者の知識（Interpersonal knowledge）、対自己の知識（Intrapersonal knowledge）の３つの知識を駆使することが求められる [6]。本研究の調査対象者たちも、対象者理解を意味する対他者の知識を駆使しながら指導を行っていることが明らかになった。

3.『方向性の明示と徹底』に関する要因

集団競技では、チーム組織の運営や個人の役割の明確化がチーム目標の達成に関わるとされ [10]、本対象者においてもチームコンセプトの明示やチーム内の役割の明確化といった概念から『方向性の明示と徹底』が導き出された。また、ハンドボールとバレーボールの競技は違えど、「球技のような相互作用種目では、凝集性が高いことが良い成績に結びつくと考えられている」[10] ことからも集団競技を指導する際には性別を問わず重要な視点の一つであることが本研究においても示唆され、結果を出している指導者も実践していた。

4.『良好なコーチアスリート関係』に関する要因

『良好なコーチアスリート関係』について考える時に、指導者と選手の関係は、指導において最も重要である [9] とされ、技術面を指導することも重要ではあるが、土台となる個人間の関係性を構築していくのも指導者の責務だと言えるのではないか。それに加えて概念として抽出された [情熱] と [責任感] を持って、[コミュニケーション] を取りながら [適切な指導] をしていくことで指導者と選手の関係をより良好なものにしていると推察される。

Ⅴ．今後の展望

今後の展望として、対象者の選定において高校生年代の指導者のみを対象としたものだけではなくて同じバレーボール競技においても、違うカテゴリーの指導者や指導者自身の年齢や性別による「コーチング観」の違いに着目することで今回の結果と異なる結果が出てくる可能性が考えられる。今回の一流高校男女バレーボール指導者の「コーチング観」も一事例に過ぎないのかもしれないが、會田 [4] の提示する事例研究の２つの意義として、１つ目に指導者自身の学びに役立てられること、２つ目に他者の学びに役立てられることがある。バレーボール競技の中では一流選手を対象としてのものはあったが、優れた指導者の「コーチング観」を調査した研究はまだされていない部分であったので本研究において、明らかになったことは新たな知見の提供ということで価値があることだっただろう。

謝辞

本調査にご協力して頂いた６名の先生方には深く御礼申し上げます。

付記

尚、本研究は平成２３年度文部科学省大学スポーツ研究活動資源活用事業～コーチ実践指導力の向上プログラム開発～の一環として行われた。

Ⅵ．参考文献

１）Abraham, A et al.（2006）. The coaching schematic: Validation through expert coach consensus. Journal of sports sciences. 24（6） pp549-564.
２）會田宏 .（2008）. ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質的研究：国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに . 体育学研究 53 pp61-74.
３）會田宏 , 坂井和明 .（2008）. 国際レベルで活躍したハンドボール選手における実践知の獲得過程に関する事例研究 . 武庫川女子大学（人文・社会科学）56 pp69-76.
４）會田宏 .（2014）. コーチの学びに役立つ実践報告と事例研究のまとめ方 . コーチング学研究 27（2）p164.
５）Côté, J et al.（1995）. The knowledge of high-performance gymnastics coaches: competition and training considerations. The Sport Psychologist, 9.
６）Côté, J., and Gilbert, w.（2009）. An integrative definition of coaching effectiveness and expertise. International Journal of Sports Science and Coaching. 24（10）pp307-323.
７）五十嵐元他 .（2019）. バレーボールにおける一流センタープレーヤーのブロックに関する研究 -「除クイック時のスプリットステップ」に着目して -. バレーボール研究 32（2）pp211-232.

８）石原創，諏訪正樹．（2011）．身体的メタ認知を通じた身体技の「指導」手法の開拓．身体知研究会（人工知能学会第 2 種研究会）SIG-SKL-09-03, pp19-26.
９）Jowett, S. and Cockerill, I. M.（2002）. Incompatibility in the coach-athlete relationship. In I. M. Cockerill（Ed）. Solutions in Sport Phychology. London：Thomson Learning. pp16-31.
10）樫塚正一他．（2008）．集団凝集性と心理的競技能力の関連性について - 大学女子ハンドボール選手の場合 -. 武庫川女子大学紀要（人文・社会科学）56 pp77-85.
11）Kidman, L., & Hanrahan, S. J.（2010）. The coaching process: a practical guide to becoming an effective sports coach. Routledge.
12）北村勝朗．（2005）．優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか？. スポーツ心理学研究 32（1）pp17-28.
13）Klein, G., & Zsambok, C. E.（Eds.）.（1997）. Naturalistic decision making. Erlbaum, Lawrence, Associates.
14）Lipshitz, R., Klein, G., Orasanu, J., & Salas, E.（2001）. Taking stock of naturalistic decision making. Journal of Behavioral Decision Making, 14（5）pp331-352.
15）Lyle, J.（2010）. Coaches' decision making: A naturalistic decision making analysis. Sports coaching pp27-41.
16）Martens, R.（1996）. Successful Coaching, 4E. Human Kinetics.
17）森祐貴，今井啓介（2019）．ビーチバレーボールのスパイク踏切動作を意識した練習方法の提案：ビーチバレーの指導をインドアバレーの練習に活用するために．スポーツパフォーマンス研究 11 pp39-45.
18）永山，貴洋，北村勝朗．（2003）. エキスパート・コンディショニング・コーチのコーチング観．教育情報学研究 1 pp99-103.
19）大谷尚．（2008）４ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案　－着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き－．名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）54（2）pp27-44.
20）Passos, P., Araújo, D., Davids, K., & Shuttleworth, R.（2008）. Manipulating constraints to train decision making in Rugby Union. International Journal of Sports Science and Coaching, 3（1）pp125-140.
21）寺下貴美．（2011）．第 7 回 質的研究方法論 ~ 質的データを科学的に分析するために ~. 日本放射線技術学会雑誌，67（4）pp413-417.
22）渡辺英児，遠藤俊郎，松井弘志．（2009）．質的研究法を用いた一流バレーボール選手におけるスキル獲得に関する研究．バレーボール研究 11（1）pp1-6.
23）Werthner, P., & Trudel, P.（2006）. A new theoretical perspective for understanding how coaches learn to coach. Sport psychologist, 20（2）p198.
24）ウィリッグ，カーラ．（2003）．心理学のための質的研究法入門――創造的な探求に向けて．上淵寿・小松孝至・大家まゆみ訳 培風館 .7-9 pp117-119.